



Designed by Yumi Son



まちと健康の情報をお届けする情報誌
「まちけんタイムズ(仮)」ついに創刊!



まちけん
タイムズ

この度、谷根千まちばの健康プロジェクトよりまちけんタイムズ(仮)を発売する運びとなりました。谷根千まちばの健康プロジェクトは、谷根千の健康づくりを住民と医療・福祉専門家、研究者などで一緒に進めていく取り組みで、「まちけん」の愛称で活動しています。まちけんと今までご縁があった方もこの新聞で初めて知ったという方も、ぜひこの新聞をきっかけに谷根千のまちとまちけんの活動についてより親しんでいただけると幸いです。

この「まちけんタイムズ」では、地域と健康に関連した記事やまちけん活動の報告などを行う予定です。地域密着型新聞として谷根千とその周辺地域を盛り上げつつ、みなさんの健康づくりに貢献することを目指していきます。当面は不定期発行ではありますが順次様々な話題を取り上げて行きますので、未長くご愛読頂ける新聞となることを願っております。

さて、創刊号のテーマは「映画と健康」です。最近、谷根千周辺地域で上映した健康に関連する映画の紹介など、映画の話題を通じて健康を考える内容となっております。こー読いただいた後は、ぜひ家族や友人など周りの人と感想を交換していただけたらとても嬉しいですよ。それではお楽しみください。

※まちけんについて
まちけん(谷根千まちばの健康プロジェクト)は、谷根千(谷中・根津・千駄木)地域の健康づくりを、住民・医療従事者・研究者など様々な人々が協力しながら進めていくプロジェクトです。モバイル屋台による健康カフェ・映画上映・マインドフルネス・オープンダイアローグ・銭湯巡り・新聞発行など様々な活動を行っています。

Facebook :
<https://www.facebook.com/YanesenMachiken/>
(@YanesenMachiken)

《コラム.. 芸術と健康》
映画が私に
与えてくれたもの

子どもの頃から映画が好きだった。特に仄暗い映画館で見るあの感じが好きだ。当時、スクリーンを通して見えてきたものは、長く暗いトンネルのような私の思春期に差し込む光であった。

良い映画には台詞が少なく、言葉の代わりに映像と音楽が用いられる。言葉を通

さないからこそ、微妙な人間の「生」が表されるのだろう。鬱屈していた15歳の私を深く揺り動かしたのは、

一本のイタリア映画だった。そのクライマックスでは様々なモノクロ映画のキスシーンが繋ぎ合わされていたが、今でもそのシーンを想い出す度に涙が溢れそうになる。あの映画が当時の私に与えてくれたのは、きっと「癒し」だったのだろう。

(そんそん)

《目次》

- 1P まちけんタイムズ(仮)創刊!
- 2P 【映画評】トークバック
- 3P 【映画評】むかしMattoの町があった
- 4P 【インタビュー】レコード屋「block」が谷根千に新規オープン

《映画評》

トークバック

〜沈黙を破る女たち

『トークバック』という映画を観る機会に恵まれた。舞台はアメリカ、サンフランシスコ。「声をあげること」「呼応しあうこと」と題されたこの映画は、女性だけで構成された劇団に密着したドキュメンタリーだ。ただ普通の劇団と違うのは、劇団員の女性達がみな世間の「辺境」に生きる女性であるということだ。それは、HIV陽性者、薬物依存者、様々な罪により刑に服する受刑者たち。皆それぞれが、虐待や近親姦といった壮絶な過去のトラウマを抱えている。この映画は、そんな彼女達が歌い、踊りながら、演劇を通して、自分の内面を見つめ、他者と交わり呼応しながら、遂には自分を受け容れていく過程の物語である。HIV陽性と告知され、「なぜ、私が？」と絶望に飲まれたあの日。「感染していなかったら今のわたしはいなかった」と運命をポジティブに捉えられるようになった日。その間に一体何が彼女を変えたのだろうか。

現代社会の心の問題の多くは、「無関心」から生まれているのかもしれない。それは自分や他人の「内面」に対する無関心だ。多くの人が関心を持つのは、外見や所有物、ステータス、貼りつけられたレッテルなどの「外面」のこと。だが、最も大事なことは、例えば自らの心の動きに一番の関心を向けるこ

とだろう。それを深く知ること、心の平穏を生み他者との関係性をより良いものにする。そして、他人が自分の内面に関心を持つてくれていることを自覚することで自分の存在価値を感じられるようになっていく。

この映画において、焦点をあてられた女性達の、十人十色の自分への向き合

い方、自分の表現の仕方、他者とのコミュニケーションの取り方は、どれも個性的で魅力的だ。最も印象に残っているのは、ひとり女性がHIV脳症の影響で台詞を忘れてしまうという問題が劇団内で持ち上がった時、その女性が「みんな私を助けてね」と言った場面。自分と向き合い、そして他者を信頼して

はじめて出てくる台詞だろう。

この映画の扱う内容は一見重いが、その描き方は非常に前向きだ。自分の常識とは違うかもしれないし、人によって巧拙はあるかもしれない。でもそれはそこまで問題ではない。皆が真剣に自分の内面に関心を持つとうとする。その簡単なようで最も難しい営

人生は必ずやりなおせる!!

どんなに苦しいときでも、新しい未来が待っている

トークバック

沈黙を破る女たち

www.talkbackoutloud.com

坂上 香 監督作品

「Lifers ライファース 終身刑を超えて」

監督・制作・編集：坂上 香 | 共同プロデューサー：麻生 歩 | 撮影：南 卓男 | 録音：森 英司 | 音楽：伊藤彰秋 | ポストプロダクション：Neo P&T

製作協力：トークバック劇団 | 宣伝：スリーピン | 制作・配給：out of frame | ドキュメンタリー映画 / 2013年 / 日本 / HD / カラー / 英語 / 日本語字幕 / 119分

演劇で、声を取り戻していく“ワケあり”な女たちの物語

みこそが、最も大事なということを教えてくれる映画である。(あゝるぐれい)

*映画「トークバック：沈黙を破る女たち」は、2017年6月28日(水)にまちけんの主催のもとシネマ・チュペキ・タバタで上映会が実施されました。写真は坂上監督の許可をいただいで利用しております。



▲坂上監督(左から2番目)とまちけんメンバー。トークバックの上映会にて。

《作品情報》

TALK BACK

トークバック

〜沈黙を破る女たち

(119分、2013年)

監督：坂上香

製作・配給：out of frame

HP：<http://www.talkbackoutloud.com>

《映画評》むかし Mattoの町があった

この作品のタイトルの「Mattoの町」の「Matto」とは、イタリア語で狂人のこと。つまり、精神病患者です。本作が舞台とする1960〜70年代のイタリアでは、精神病患者は危険で社会の秩序を乱す存在と考えられマニコミオと呼ばれる巨大な病院の中に閉じ込められていました。患者たちは扉や金網で囲われた病院から出入りする自由はなく、孤立した状況の中で非人間的な扱いを受けさせられていました。

この映画が描くのは、精神病患者が自分たちと医療者だけの閉じられた「町」、つまり病院からいかに解放されていったのかという過程です。その中心となったのが本作の主人公、フランコ・バザリアでした。

バザリアは精神病院を廃止する運動のリーダーとして活躍した実在の精神科医です。本作で描かれたように彼の運動は大きく共感を呼び、1978年にはイタリア全国で精神病院の廃止を決めた画期的な180号法(別名

バザリア法)を成立させるまでに至りました。本作は若きバザリアが1961年にイタリア北東に

ある国境の町ゴリツィアの精神病院に院長として赴任するところから始まります。到着したばかりの病院で彼



が眼にしたのは、治療の名の下に振るわれる暴力でした。行動の自由を奪うための強制的な注射、十年以上におよぶ拘束、反抗的だというだけ

で檻に入れる。バザリアはこうした強権的な管理が病を癒すのではなくむしろ病を作り深めていくのだとして「自由こそ治療だ」を旗頭

に治療の形を大きく転換させてゆきます。

もちろん話は一筋縄では行きません。同僚からの反発、非協力的な行政。家族からの拒絶。さらに久しぶりに自宅に外泊した男性患者が妻を死なせてしまう事件を起こしたこと

から、バザリアも責任を問われ病院を追われてしまいます。そんな中、とても印象的だった場面があります。アドリア海に面した美しい港町トリエステにある病院に再び院長として招かれたバザリアは、院内に美術工房を作り患者たちと共に街へ出てパレードを行います。さあよいよ出発というところで困った自体が起こります。張りぼての青い馬の首が長すぎて、どうやってもドアの明り窓に引っかかって外に出れないのです。ある患者がつぶやきます。「偽物の馬でもここを出ることができないのか」と。

この馬が患者たちの象徴だとすれば、それを外に出られなくしている飾り窓とは患者たちを病院に閉じ込めている社会制度

や文化の象徴です。精神病患者は危険、恥ずかしい、迷惑だ、何もできない。そうした視線が一部の人々を孤立させる壁となり、病いを深め、問題を特定の人だけにすりつけ「狂人」を作り出すのでしょうか。

程度こそ違っても、こうした力の働きは私たちの普段の生活にも無縁ではありません。さらに、今も世界的にもトップクラスの規模や入院日数を維持する日本の精神病院では? それは果たして何を生み出しているのでしょうか。私たちが作り、守り続けている「飾り窓」っ

てなんだろう? そんな問いをもちうことができた作品でした。(松下)

*映画「むかしMattoの町があった」は、2017年2月4日(土)および2月11日(土)にまちけんヒトトビク人と美の表現活動研究室のせいこさんの共催のもと、谷中防災コミュニティセンターにて上映会が実施されました。上映会では映画の鑑賞に加え、家庭医・まちけん主催者の孫大輔さんと精神科医の塚原美穂さんによるスピーチや、感想を自由に話し合う座談会が行



▲上映会当日の様子。上映後には食事をしながら、参加者や主催者同士で感想などを語り合いました

《作品情報》

むかしMattoの町があった

(198分、2010年)

監督・マルコ・トゥルコ

配給・イメージ・サテライト

HP:

<http://180matto.jp>

われ、上映会は盛況のうちを終了しました。今後のまちけん主催による本作上映会は現在予定されておられません。書籍「精神病院はいらない!」イタリア・バザリア改革を達成させた愛弟子3人の証言」に本作のDVDが付属しています。本作を鑑賞されたい方は、当書籍や「日本のMattoの町を考える会」のエロをご参照ください。なお本記事の写真は、旧180人のMattoの会エロより許可をいただいで転載しております。

日本一ハードルの低いレコード屋 「block」が谷根千にオープン

谷根千に新しいレコード屋が出現します！その名も「block」。今回は目下開店準備中のblockを訪れ、店主の鈴木宏明さんにお話を聞いてきました。

「谷根千にレコード屋を作るといいますが、なぜレコード屋をやろうと思ったのですか？」

鈴木：元々は日本郵政の社員として働いていました。その仕事はとても堅

いものでした。そんな生活が続くうちに「人が集まる場所を作りたい！」と思うようになり、何か新しいことを始めることを決めました。それで何をやらうってなつた時に、学生時代からずっと音楽が好きだったこと、音楽が人間関係を結んでくれた経験を思い出して、音楽を軸にすることにしました。あとは、今またレコードブームが来ていることなどもあって、

コード屋をやることを思いつきました。
「店名の「block」にはどんな意味があるのですか？」

鈴木：70年代のニューヨーク・サウスブロンクスで開かれていたブロック・パーティー (block party) にちなんで名づけました。当時のニューヨークでは土地がブロックと呼ばれる区画に分けられていましたが、夜になると人々があるブロックの一角に集まって音楽を楽しんでいました。このブロック・パーティーを通じてできた音楽の土台と人の繋がりがヒップホップという音楽ジャンルを生み出したと言われています。自分たちが作っているレコード屋にも、音楽や人との新しい出会いを産む場になってほしいと思い、blockと名付けました。
「どんなお店を目指していく予定ですか？」

鈴木：日本一ハードルの低いレコード屋にしたいと思っています。レコード屋って初心者にはなかなか入りにくいじゃないですか。そういったハードル

をなるべく無くして、どんな人でも気軽に来れるような場所を目指しています。
「ありがとうございます！」

(インタビューよしだ)

block

11月頃オープン予定

アクセス：東京メトロ千代田線根津駅

出口2より徒歩1分

facebook:

<https://www.facebook.com/blocknezu/>

m/blocknezu/

《コラム》 雑記帳

テレビを観ていると思わぬ発見をする事がある。この日観たのは砂漠のライオンが群れてキリンを襲うシーンだった。

長い首と細い脚で大地を意外なスピードで駆け抜けるキリンと、群れて陣を組みながらじわりじわりと追い詰めていくライオン。キリンの華奢な脚にライオンの鋭い歯が噛み付きそうなのに距離が縮まった時、先回りした一匹が一撃必殺とキリンに飛びかかった。ああもうだめだ、と画面越しに思わず目をつむりかけた瞬間、予想を覆してキリンはライオンを蹴散らし、軽快に逃げ果せたのだ。

そんなシーンを見た時、ふと気づいた。そういえばキリンは、何食わぬ顔をして高い木々の葉っぱを食べているように見えるけれど、実は大きな時間の流れの中でコツコツ首を長く進化してきた努力家だった。

一方でライオンは攻撃的な印象が強いけれど、本来はキリンのような大型動物を襲うことは滅多にない。不毛の地、砂漠で生きる彼らも、必死で生きているのである。

生きる力というのは、生きとし生けるものすべての側で淡々と、しかし確かに煌めいているのだ。(かな)



編集後記

最後までお読みいただきありがとうございます。まちけんタイムズ(仮) 創刊号はいかがでしたでしょうか。ぜひ感想や要望をまちけんまでお送りいただけると嬉しいです。取り上げてほしい話題や新聞作成への参加希望なども大歓迎ですので、お気軽にご連絡ください。

まちけん広報誌の構想が昨年冬にできてから、創刊号発行まで実に10ヶ月もの月日が経っていました。今後は定期的に発行を続けていきたいと思っております。末長くお付き合いいただけますと幸いです。

《お問い合わせ》

谷根千まちばの健康プロジェクト(まちけん)
住所: 東京都台東区谷中6-3-5(近藤・孫宅内)
E-mail: ynsmachiken@gmail.com
TEL: 050-5897-9930
プロジェクト代表: 孫大輔